

川崎大師教學研究所紀要・第10号抜刷
令和七年三月二十一日発行
川崎大師教學研究所

了賢撰『他師破決集』 訳注（八）——卷第二ノ二——

別所弘淳

了賢撰『他師破決集』訳注（八）——卷第二ノ二——

別 所 弘 淳

はじめに

『他師破決集』の撰者である侍従僧正了賢（一二七九～一三四七）は、『仁和寺諸院家記』（心蓮院本¹）には、

了賢僧正 侍従、毛利時賢子、了遍僧正御附法、東寺・仁和寺・大覚寺等学頭、附法八人

と説かれ、また同じく『仁和寺諸院家記』（恵山書写本²）には、

了賢僧正 侍従、毛利親宗子、了遍僧正附法、仁和寺・大覚寺等学頭、正安元年十一月十九日、

於菩提院道場、対大僧正了遍受灌頂、色衆八口、教授前大僧正禪助、但別座、貞和三

年 月 日、入滅

と説かれるように、毛利時賢、あるいは毛利親宗の子であり、正安元年（一二九九）に仁和寺菩提院において了遍（一二三四～一三二一）より灌頂を受け、東寺・仁和寺・大覚寺の学頭となった学匠である。

また、その主著『他師破決集』は、『真言宗全書』解題によれば、他宗の諸学匠（徳一・道詮・珍海・最澄・円珍・安然・兼証・淡海三船等）が東密の教義等に対しておこなった疑難を破するための書であり、三十一の条目で構成されている。巻二の奥書には、「元徳三年正月日、依^二大覚寺殿仰^一注^二進之^一。法印権大僧都了賢⁵」と記され、また、巻五の奥書には、「正慶元年五月日、依^二大覚寺殿仰^一注^二進之^一／法印権大僧都了賢⁶」とある通り、元徳三年（一三三一）、正慶元年（一三三三）の頃に「大覚寺殿」の仰せによって撰述されたものである。

『他師破決集』は、先行研究では、主に徳一の『真言宗未決文』に対する反駁書として取り扱われているが、それ以外の諸学匠に対する反駁が扱われた論稿はほとんどなく、または部分的に取り上げられるのみであり、了賢や『他師破決集』自体を扱った研究は全くないといっても過言ではない。

そこで『他師破決集』の全体像を把握することを目的として、訳注を行うこととした。この訳注において用いるのは、「承応二年刊本」を底本、「仁和寺蔵古写本」を対校本とした、『真言宗全書』巻二一所収の本である。

凡例

一、本稿は、了賢撰『他師破決集』の【原文】に、【訓読】・【典拠】・【解説】を施したものである。

二、【原文】は、詳細な【解説】を施すことができるように、条目を更に細かく区切ることとした。尚、【訓読】を表記しているため、【原文】に返り点を付すことはしなかった。

三、条目には、『真言宗全書』解題（二二七頁上～二二八頁上）にしたがって通番号を付した。巻第二ノ二に収録される条目は次の通り。

七、真言宗鉄塔相承耶事（後半部）

四、【原文】については、いわゆる異体字の類も含め、原則として通行の字体に改めた。また踊り字も元の字体に改めた。中略を示す「○」については【原文】【訓読】ともに「……（中略）……」と表記した。

五、【訓読】は、通読の便を考慮し、文意に応じて適宜改行し、段落を設けた。漢字は原則として通行

の字体を用いた。また書名は原則として『』で囲い、引用文も「」で囲った。また割注にはへゝを付した。

六、【典拠】における主要引用文献の略号は以下の通り。

『大正新脩大藏經』↓大正、『伝教大師全集』↓伝全、『卍続藏經』↓卍続藏、
『弘法大師全集』↓弘全、『真言宗全書』↓真全

七、【解説】は、関連する事柄について言及しながらも、できる限り現代語訳することに努めた。

訳注研究

【原文】

重難云、於金剛界者任義決文且可許之。於胎藏者猶非無疑滯。法華伝不足指南故也。是以他門祖師悉不許之。又大日經序意、自北天竺勃魯羅国出現。依何文証可治定鉄塔相承之旨耶。

【訓読】

重ねて難じて云く、金剛界に於ては『義決』の文に任せて且く之れを許すべし。胎藏に於ては猶お疑滞無きに非ず。『法華伝』⁽²⁾は指南に足らざる故なり。是を以て他門の祖師は悉く之れを許さず。又『大日経序』の意、北天竺の勃魯羅国より出現す。何の文証に依つて鉄塔相承の旨を治定すべきや。

【典拠】

(1) 『義決』の文：金剛智口・不空記『金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣』（以下、『金剛頂經義訣』）卷上（大正三九・八〇八頁上・中）に、「其大経本、阿闍梨云、経夾広長如レ床、厚四五尺有ニ無量頌⁽¹⁾、在天竺界鉄塔之中。仏滅度後数百年間、無⁽²⁾人能開⁽³⁾此塔。以⁽⁴⁾鉄扉・鉄鎖⁽⁵⁾而封⁽⁶⁾閉之。其中天竺国仏法漸衰。時有⁽⁷⁾大德、先誦⁽⁸⁾持大毘盧遮那真言⁽⁹⁾、得⁽¹⁰⁾下毘盧遮那仏而現⁽¹¹⁾其身⁽¹²⁾及現⁽¹³⁾多身⁽¹⁴⁾、於⁽¹⁵⁾虚空⁽¹⁶⁾中⁽¹⁷⁾說⁽¹⁸⁾此法門及文字章句⁽¹⁹⁾。次第令⁽²⁰⁾レ写訖即滅。即今毘盧遮那念誦法要一卷。是時此大德持誦成就願⁽²¹⁾開⁽²²⁾此塔。於⁽²³⁾二七日中⁽²⁴⁾遶⁽²⁵⁾塔念誦。以⁽²⁶⁾白芥子七粒⁽²⁷⁾打⁽²⁸⁾此塔門⁽²⁹⁾乃開。塔内諸神一時踊怒、不⁽³⁰⁾レ令⁽³¹⁾得⁽³²⁾入。唯見⁽³³⁾塔内香灯光明一丈二丈、名華宝蓋滿⁽³⁴⁾中懸列⁽³⁵⁾。又聞⁽³⁶⁾讚声⁽³⁷⁾讚⁽³⁸⁾此経王⁽³⁹⁾。時此大德至、心懺悔發⁽⁴⁰⁾大誓願⁽⁴¹⁾、然後得⁽⁴²⁾入⁽⁴³⁾此塔中。入已其塔尋閉。経⁽⁴⁴⁾於多日⁽⁴⁵⁾讚⁽⁴⁶⁾此経王⁽⁴⁷⁾広本一遍⁽⁴⁸⁾為⁽⁴⁹⁾如⁽⁵⁰⁾食頃⁽⁵¹⁾。得⁽⁵²⁾諸仏菩薩指授⁽⁵³⁾所⁽⁵⁴⁾堪記持不⁽⁵⁵⁾忘。便令⁽⁵⁶⁾出⁽⁵⁷⁾塔塔門還閉如⁽⁵⁸⁾故。爾時書⁽⁵⁹⁾下写所⁽⁶⁰⁾記持⁽⁶¹⁾法⁽⁶²⁾有⁽⁶³⁾二百千頌⁽⁶⁴⁾。此経名⁽⁶⁵⁾金剛頂経⁽⁶⁶⁾者、……（以下略）と、『金剛頂経』が鉄塔中より誦出された

とあることを指す。

(2) 『法華伝』…僧祥撰『法華伝記』巻一〇(大正五一・九五頁中)に、「昔外国有「鉄塔」。高丈餘。於中安置芬陀利迦・阿差摩・摩訶毘盧舍那經等梵夾。各有「百千偈」と、『大日経』が鉄塔中に安置されていたとあることを指す。ただし、『法華伝』は指南に足らざる」とあることは不明である。『法華伝』の記述が根拠薄弱であるということであろうか。

(3) 他門の祖師…例えば、最澄撰『内証仏法相承血脉譜』(伝全一・二三七～二四四頁)に、「胎藏曼荼羅毘盧遮那如来—中天竺天那蘭陀寺善無畏三藏大師—大唐沙門一行大師・大唐沙門義林大師—大唐泰嶽靈巖寺沙門順曉阿闍梨—前入唐受法沙門最澄・前入唐受法沙門義真」と、胎藏法が「胎藏曼荼羅毘盧遮那如来」から「善無畏」へ相承されたことが示されている。すなわち、胎藏が南天鉄塔の外で相承されたことを示す証文といえる。なお、本稿では便宜上「大唐沙門一行大師・大唐沙門義林大師」、「前入唐受法沙門最澄・前入唐受法沙門義真」と表記した(傍線部)が、この「・」は一行と義林、最澄と義真が並列で表記されていることを示したものである。

また、円仁撰『金剛頂経疏』巻一(大正六一・一八頁上)には、『金剛頂経義訣』の文を引きながら、「在「南天竺界鉄塔之中」。故知、此経撮「其旨要」、以為「三卷」と、鉄塔より相承された経典について『教王経』のみに言及があり、『大日経』については触れられていない。これらを勘案して、『法華伝』の『大日経』が鉄塔に安置されていた」という記述を、「指南に足らず」・「他門の

祖師は悉く之れを許さず」としたのだと考えられる。

（4）『大日経序』…崔牧『大毘盧遮那成仏神変加持経序』（中統蔵三六・二七丁右上）に、「毘盧遮那神力加持経者、蓋諸仏不思議境界、深密妙用之靈府也。大本十万頌。梵方秘而密蔵。今所訳者、昔北天竺国界内有二小国、号為二勃嚕羅。其国城北有二大石山。壁立干レ雲懸崖万丈。於其半腹有下蔵二秘法二之窟^上。毎年七月即有二衆聖集^レ中。復有数千猿猴。持^レ経出曬。既当二晴朗二髣髴見^レ之。将^レ昇^二無階^一似^レ觀^二雲鴈属^一。暴風忽至乃吹^二一梵夾^一下来時、採樵人輒收得。睹^二此奇特^一、便即奉^二獻於王^一。王既受^レ之得^二未曾有^一。至^二其日暮^一有^二大猿^一。来索^二此経^一。斯須未^レ還乃欲^二殞^レ身自害^一。善巧方便殷勤再三云、経夾即還、但欲^レ求^レ写。見^二王詞懇^一、遂許^二通融^一云、且為^二向前^一受撰、三日即来却取。王乃分^レ衆繕写及^レ限却還。王唯太子相^二伝其本^一、不^レ流^二于外^一。近有^二中天大瑜伽阿闍梨^一。遠涉^二山河^一尋^二求秘宝^一。時王、睹^二闍梨有^レ異欣然伝^二授此経^一」とあることを指す。

【解説】

本条目の三重の難である。問者は、金剛界の相承については『金剛頂経義訣』の文の通り、鉄塔より相承されたもので問題ないとの見解を示すが、胎蔵に関しては疑難があるとする。問者は『法華伝』の記述を「指南に足らざる」とするが、これは『法華伝』の記述が信用できないということであろうか。他門の祖師（最澄や円仁を指すか）は、『法華伝』の説には依らずに『大日経』を塔外相承としている。

また『大日經序』には、『大日經』が北天竺の勃魯羅国より出たものであると説かれている。このように塔外相承の説があるのに、どのような根拠に基づいて胎藏を鉄塔相承と主張するのか、と問難している。

【原文】

答。鉄塔相承之旨、潤色雖無量、且出五義示之。

一、秘教伝来唯可限此塔。所以者何、所謂内証教流布人間、師資伝受之儀式、唯可在此鉄塔。是以聖位經云、自受用仏從心流出無量菩薩。皆同一性。謂金剛性。対遍照如来受灌頂職位。彼等菩薩各説三密門、以獻毘盧遮那及一切如来、便請加持教勅。毘盧遮那言、汝等将来、於無量世界為最上乘者、令得現生世出世間悉地成就。彼諸菩薩受如来勅已、頂礼仏足、圍繞毘盧舍那仏已、各還本方本位、成為五輪、持本幟幟。……（中略）……此即毘盧遮那聖衆集会、便為現証卒都波塔^文。大日經疏七云、如来自証法体非仏自作、非餘天人所作、法爾常住。而以加持神力出興于世利益衆生^文。

此等方指鉄塔為人間流布之出処者也。凡真言教以五輪法界為能生体故、兩部同自此塔婆可出現故也。適雖有伝一尊一契之処、唯是感得不思議而非伝法軌則。所謂大日經序北天竺相承、龍猛菩薩開塔以前感得毘盧遮那念誦法要、無畏三藏金粟王塔下感見供養次第法等是也。真言秘教必有師資伝受之儀。而於北天竺出現者、獼猴落之樵夫伝之。豈是密教伝持之儀式乎。頗非論限歟。今龍猛菩薩親詣塔中対金剛薩埵受

両部職位。若唯伝金界不受胎藏者、大日經宗失師伝者歟。将又鉄塔請来之外於何処誦伝胎藏耶。如他門相承者、大日經金薩、授掬多^{云々}。然者掬多在何処受此經耶。不許南天鉄塔之誦伝、又簡北天石窟之相承。若不勘誦出之会場者、更可為胸臆之虚説者哉。

【訓読】

答う。鉄塔相承の旨、潤色無量なりと雖も、且く五義を出して之れを示さん。

一には、秘教の伝来は唯だ此の塔に限るべし。所以いかんとなれば、所謂る内証教の人間に流布するに、師資伝受の儀式、唯だ此の鉄塔に在るべし。是を以て『聖位經』⁽¹⁾に云く、「自受用仏は心従り無量の菩薩を流出す。皆な同一の性なり。謂く金剛性なり。遍照如来に對して灌頂の職位を受く。彼等の菩薩は各の三密門を説き、以て毘盧遮那及び一切如来に獻じて、便ち加持教勅を請う。毘盧遮那の言く、汝等将来に、無量世界に於て最上乘者の為に、現生に世出世間の悉地成就を得せしむ。彼の諸菩薩は如来の勅を受け已りて、仏足を頂礼し、毘盧舍那仏を圍繞し已りて、各の本方本位に還つて、為に五輪成じて、本幟幟を持す。……（中略）……此れ即ち毘盧遮那聖衆集会、便ち現証卒都波塔と為す」⁽²⁾と文り。『大日經疏』七に云く、「如来自証の法体は仏の自作に非ず、餘の天人の所作に非ず、法爾常住なり。而も加持神力を以て世に出興して衆生を利益す」⁽³⁾と文り。

此れ等は方に鉄塔を指して人間流布の出処と為すものなり。凡そ真言教は五輪法界を以て能生の体と

為すが故に、両部同じく此の塔婆より出現すべき故なり。適ま一尊一契を伝うるの処有りと雖も、唯だ是れ感得不思議にして伝法の軌則に非ず。所謂る『大日経序』の北天竺の相承、龍猛菩薩開塔以前に感得の毘盧遮那念誦法要、無畏三藏金粟王塔下感見の供養次第法等是れなり。真言秘教は必ず師資伝受の儀有り。而るに北天竺出現に於ては、獼猴の之れを落とし樵夫之れを伝う。豈に是れ密教伝持の儀式ならんや。頗る論の限りに非ざるか。今龍猛菩薩親り塔中に詣で金剛薩埵に対して両部の職位を受く。若し唯だ金界のみを伝えて胎蔵を受けざれば、大日経宗は師伝を失するものか。將た又鉄塔請來の外に何れの処に於て胎蔵を誦伝せんや。他門の相承の如きは、『大日経』は金薩、掬多に授くと云云。然らば掬多は何れの処に在りて此の経を受くるや。南天鉄塔の誦伝を許さず、又北天石窟の相承を簡う。若し誦出の会場を勘へざれば、更に胸臆の虚説と為るべきものか。

【典拠】

- (1) 『聖位経』…不空訳『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門序』(大正一八・二八八頁上)。
- (2) 『大日経疏』七…一行記『大毘盧遮那成仏経疏』卷七(大正三九・六五〇頁下)。
- (3) 北天竺の相承…『大日経序』の記述(前注(4)参照)を指す。
- (4) 毘盧遮那念誦法要…『金剛頂経義訣』卷上の記述(前注(1)参照)を指す。
- (5) 供養次第法…不可思議撰『大毘盧遮那供養次第法疏』卷上(大正三九・七九〇頁中)に、「有二城、

名_二乾陀羅_一。其国之王、仰_二憑和上_一、受法念誦。其經文広、義深、不_レ能_二尋_一遂供養次第、求_二請和尚供養方法_一。和上受_レ請、於_二金粟王所造塔辺_一求_二聖加被_一、此供養法忽現_二空中_一、金字炳然。和上一遍略読、分明記著。仰_レ空云、誰所造也。云、我所造也。云、誰我也。云、我是文殊師利也。即喚_二書人_一遂便写取。即与_二其王一本_一、自写_二一本_一随行将行、流_二通四方_一也。所謂小子者、厥号_二善無畏三藏和上_一と、善無畏が金粟王塔下において「大日経供養次第法」を感得したと説かれることを指す。

（6）他門の相承・例えば、海雲『西部大法相承師資付法記』卷下（大正五・七八六頁中）に、「三藏善無畏云、此法從_二毘盧遮那仏_一付_二囑金剛手菩薩_一。金剛手菩薩經_二數百年_一、伝_二付中印度那爛陀寺達磨掬多阿闍梨_一とある。また、安然『諸阿闍梨真言密教部類総録』（『八家秘録』）卷上（大正五五・一一一五頁上）には、「胎藏相承云、金剛手付_二掬多_一とある。

【解説】

三重の難を受けての答者の回答である。答者は、鉄塔相承には多くの潤色があるものの、五つの義によつて信用に足るものであるとする。

まず第一の義として、密教の伝来はこの鉄塔のみに限るべきであるとする。その理由として、密教（内証教）が人間へと流布したのは、師資伝授の儀式がこの塔のみで行われたためであるとする。このこと

について『聖位經』に、「自受用仏は自心より同一性の無量の菩薩を流出し、彼らに灌頂を授けた。これらの菩薩はそれぞれ三密門を説き、毘盧遮那仏・一切如来に加持教勅を請う。毘盧遮那仏は彼らに、無量世界において最上乘者のために現生に世間・出世間の悉地成就を得させよと説く。如来の教勅を受けた諸菩薩は、仏足を頂礼し毘盧遮那仏を圍繞しおわつてそれぞれの本位に還り、五輪を成じてそれぞれの象徴となるもの（幟幟）を持した。……（中略）……毘盧遮那仏の聖衆集会たる諸菩薩を現証卒塔婆塔となす」とあることを挙げる。また『大日經疏』に、「如来自証の法体は仏が自作したのではなく、天人が造つたものでもなく、本来的に常に存するものである。そして仏は加持神力によつて人間界に出て衆生を利益する」と説かれていることを挙げ、これらの記述が鉄塔を密教人間流布の出拠とするものであると主張する。

そして真言密教は、法界体性たる大日如来（三昧耶形・五輪塔）を能生の体とするため、金胎両部は塔婆（大日如来）より出現するべきであると説く。したがって、『大日經序』の北天竺における相承や、龍猛が南天鉄塔を開く以前に感得した「毘盧遮那念誦法要」、善無畏が金粟王塔下において感見した「供養次第法」などは、一尊一印契を伝えることはあつてもその感得が不可思議なものであるのみで、真言密教の伝法の規則とは異なるものであると主張する。

真言密教には師資伝授の儀が必要であり、『大日經序』の北天竺出現の記述は、彌猴の落とした『大日經』を樵夫が伝えたものであつて、密教相承の儀式とは大きく異なるものであると指摘する。したがつ

て、この記述を『大日經』の相承としてはならないと主張している。さらに、もし龍猛が南天鉄塔内に
おいて金剛薩埵より金剛界のみを伝えて胎藏法を受けなかったのだとしたら、胎藏法は師伝を失つてし
まうのではないかとし、また胎藏法を鉄塔で相承しなかったのだとすると、どこで胎藏法を受伝したの
であろうかと説き、龍猛が南天鉄塔にて両部を金剛薩埵より相承されたことを強調している。

最後に、他門の「『大日經』は金剛薩埵が達磨掬多に授けた」という相承について触れ、もしこの通
りであるならば、達磨掬多はどこで『大日經』を相承したのかと疑問を呈している。他門が『大日經』
の南天鉄塔誦伝を許さず、その上北天竺での相承は密教の相承には適わないものであるため、もし『大
日經』の誦出の場所を考えないのであれば、他門の説は虚説といわざるを得ないのではないかと、と非難
している。

【原文】

二、龍猛大聖正受懸記。所謂楞伽經中内証智教未來当有龍樹菩薩。出現南天竺三伝持之^{云々}。而滅後八百年
中龍樹在南天示開塔之不思議。彼懸記内証智無簡胎藏。何唯局金界不通胎藏耶。就中、菩提心論中四処
引大日經。龍樹若不伝之者、何自製論中可引用之耶。

三、両部相承不可相違。凡両部者眼目異名不離法体也。若伝一界不知餘界者、即墮辺見之謬執、未及不
二之実義。金剛頂說大悲胎藏印明、大日經有金剛法界名字。伝持若闕一界者、難達經宗者也。如東寺所

伝者、両部同大日・金薩・龍猛・龍智・金剛智・不空・惠果伝之。如他門説者、金界者大日・金薩・妙吉祥・龍樹・龍智・金剛智・不空・惠果伝之。善無畏者金剛智弟子、不空同門。胎藏者大日・金薩・掬多・無畏・玄超・惠果伝之。金剛智者善無畏弟子、玄超同門。海雲・造玄記意大概同之。両部不斉血脈難達不二之実義者哉。

【訓読】

二には、龍猛大聖は正しく懸記を受く。所謂る『楞伽經』中の「内証智教は未来に当に龍樹菩薩あるべし。南天竺に出現して之れを伝持す」と云云。而るに滅後八百年中に龍樹南天に在りて開塔の不思議を示す。彼の懸記の内証智は胎藏を簡うことなし。何ぞ唯だ金界に局つて胎藏に通ぜざらんや。就中、『菩提心論』中の四处に『大日經』を引く。龍樹若し之れを伝えざれば、何ぞ自ら製する論の中に之れを引用すべきや。三には、両部相承は相違すべからず。凡そ両部とは眼目の異名にして法体を離れざるなり。若し一界のみを伝えて餘界を知らざれば、即ち辺見の謬執に墮し、未だ不二の実義に及ばず。『金剛頂』に大悲胎藏の印明を説き、『大日經』に金剛法界の名字有り。伝持若し一界を闕かば、經宗に達し難きものなり。⁽⁴⁾東寺所伝の如きは、⁽⁵⁾両部は同じく大日・金薩・龍猛・龍智・金剛智・不空・惠果と之れを伝う。他門の説の如きは、金界は大日・金薩・妙吉祥・龍樹・龍智・金剛智・不空・惠果と之れを伝う。善無畏は金剛智の弟子にして、不空と同門なり。胎藏は大日・金薩・掬多・無畏・玄超・惠果と之れを伝う。金剛智は善無畏の弟子にして、玄超と同門なり。⁽⁷⁾海雲・造玄の記の意は大概之れに同じ。両部不斉の血

脈は不二の実義に達し難きものか。

【典拠】

（1）『楞伽經』…菩提流支訳『楞伽經』卷九（大正一六・五六九頁上）に、「我乘内証智、妄覺非境界。如来滅世後、誰持為我説。如来滅度後、未來当有_レ人。大慧、汝諦聽、有_レ人持_二我法_一。於_二南大國中_一、有_二大德比丘_一、名_二龍樹菩薩_一。能破_二有無見_一、為_レ人説_二我法_一、大乘無上法、証_二得歡喜地_一、往_二生安樂國_一」とあることの取意。

（2）『菩提心論』…伝統的に龍猛（龍樹）の撰述とされる『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』（以下、『菩提心論』）に、次のように『大日經』が四文引用されていることを指す。すなわち、このことによつて龍猛が金剛界だけでなく胎藏法も伝えていた根拠としている。

①如_二大毘盧遮那成仏經_一云、諸法無相、謂虛空相（大正三三・五七三頁中）

②如_二大毘盧遮那經_一云、菩提為_レ因、大悲為_レ根、方便為_二究竟_一（同・五七三頁下）

③故大毘盧遮那經云、如_レ是真實心、故仏所_二宣説_一（同・五七四頁中）

④故大毘盧遮那經云、悉地從_レ心生（同・五七四頁下）

（3）『金剛頂』…例えば、空海が『金剛頂經』として種々の著作に引用する『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇經』卷下（大正二八・二六三頁中）には、「爾時仏母金剛吉祥、復説_二成就大悲胎藏八字真言_一曰、**𑖀𑖄𑖔𑖑𑖣𑖅**

尾_レ囉_ミ吽_ミ欠_ミ吽_ミ紇哩_ミ合_ミ我_ミ噯。若誦_ミ滿一千万遍、獲_ミ得大悲胎藏中一切法、一時頓証。其印如_ミ「釈迦牟尼鉢印」と、胎藏法の印・真言が説かれている。

(4) 『大日經』…『大日經』卷一(大正一八・一頁上)に、「如_レ是我聞。一時薄伽梵、住_ミ如来加持広大金剛法界宮、一切持金剛者皆悉集会」と、『大日經』に「金剛法界」の名がみられることを指す。

(5) 東寺所伝…空海『秘密曼荼羅教付法伝』卷一(弘全一・二・四頁)に、「所_レ謂法仏者、常住三世淨妙法身法界体性智大毘盧遮那自受用仏是也。金剛頂經及大日經等説是。……(中略)……如_レ是法身・智身二種色相平等平等、徧_ミ滿一切衆生界・一切非情界、常恒演_ミ説真実語・如義語漫荼羅法教。即是楞伽所_レ謂真実説法者是也。……(中略)……大日如来、普遍常恒雖_ミ演_ミ説如_レ是唯一金剛秘密最上仏乗大漫荼羅法教、而非_レ機非_レ時、不得_ミ聴聞、信受、修行、流伝。所_レ謂道不_ミ自弘、弘必由_レ人。誰能弘者。則有_ミ七箇大阿闍梨耶。上自_ミ高祖法身大毘盧遮那如来、下至_ミ青龍阿闍梨、嫡嫡相統迄_レ今不_レ絶。斯則如来加持力所致也。……(中略)……第二、列_ミ付法阿闍梨名号_ミ及表_レ徳者、彼伝法阿闍梨名号云何。第一伝法阿闍梨、号曰_ミ摩訶毘盧遮那娑多他揭多。第二付法祖、名曰_ミ金剛薩埵阿闍梨耶。第三祖、名曰_ミ龍猛菩薩阿闍梨耶。第四祖、名曰_ミ龍智菩薩阿闍梨耶。第五祖、金剛智阿闍梨耶。第六祖、不空金剛阿闍梨耶。第七祖、青龍寺惠果阿闍梨耶」とある。

(6) 他門の説…例えば、了賢と同時代の天台僧、光宗(一二七六～一三五〇)の『溪嵐拾葉集』卷五一(大正七六・六七一頁下)には、「問。覺大師印信血脈相承次第如何。示云、胎藏界相承依_ミ善無畏三藏説。

大日如来・金剛手・掬多・善無畏・玄超・惠果・義操・義真・慈覺。金剛界血脈相承依「龍智」説。
大日如来・金剛薩埵・妙吉祥・龍猛・龍智・金剛智・不空・惠果・惠則・元征・慈覺」と説かれて
いる。

（7）海雲・造玄の記：海雲『金胎両界師資相承』（正統蔵九五・四九六丁右〜四九七丁右）に、金剛界の血脈として「遮那―金薩―龍猛―龍智―金智―不空―惠果」、胎藏界の血脈として「遮那―金手―掬多―無畏―玄超―惠果」とある。また、造玄『胎金両界血脈』（正統蔵九五・四九七丁右〜左）には、胎藏界の血脈として「大日―金剛手―達磨掬多―善無畏―玄超―惠果」、金剛界の血脈として「大日―普賢―曼祖室利―龍猛―龍智―金智―不空―惠果」とある。

【解説】

次に第二義は、龍猛はまさしく懸記を受けた者であるとする。これは、『入楞伽經』に「内証智教（密教）は、未来に龍樹が南天竺に現れて、これを伝持する」と説かれることである。これが龍猛の南天鉄塔での相承を指すとし、『楞伽經』の懸記の「内証智教」には胎藏法も含まれるとする。さらに伝統的に龍猛の撰述とされる『菩提心論』の中には『大日經』が四文引用されているため、もし龍猛が『大日經』を相承していないのであれば、どうして自ら撰述した『菩提心論』に『大日經』が引用できるのであろうか、と主張している。

次に第三義は、兩部の相承は相違してはならないというものである。兩部は名こそ異なるものの、その教えと本質は同じものであるとし、『金剛頂經』には胎藏法の印明が説かれ、『大日經』には「金剛法界」という文言があることを、兩部不二であることの例証としている。そして、もし一界のみしか伝えないのであれば、これは偏りがあることになってしまい兩部不二の実義に違うものとなってしまうと説く。

さらに東密と台密の血脈の相違についても触れ、東密は、兩部ともに「大日—金薩—龍猛—龍智—金剛智—不空—惠果」の血脈であるが、他門（台密）は、金剛界は「大日—金薩—妙吉祥—龍樹—龍智—金剛智—不空—惠果」、胎藏法は「大日—金薩—掬多—無畏—玄超—惠果」と兩部の血脈が相違することを指摘する。そして、台密の兩部の血脈が相違することは、不二の実義に達していないものであると非難している。

【原文】

四、南天鉄塔者秘密幟幟也。秘教之意、一一法相非無幟幟。然此鉄塔如来三摩耶身也。兩部法門不可出此中。五字・五仏雖有不同、並是五輪法界所納也。兩部大經安置塔内、專契符此道理。大師釈此塔云法界宮殿毘盧遮那現証卒都婆是也^{云々}。法界宮殿中何不撰兩部法教耶。

五、東寺相承写瓶不謬。所謂他門血脈以海雲・造玄記為依憑。而海雲受義操、造玄受法全。共青龍和上孫弟也。高祖大師直謁和上^惠親受印璽。門徒数輩中、唯義明与高祖受兩部大法。自餘諸人^{（續力）}讒雖受一界不

兼備兩部。是故吳殷纂云、日本沙門空海來求聖教。漢梵無差。猶如渴瓶（字カ）云云。以高祖訓說對比彼等祖師、更非同日之論。何況出生義・表制集・貞元錄・不空行狀等、專相符東寺之伝。相承之正流、以可知矣。

【訓読】

四には、南天鉄塔は秘密の幟幟なり。秘教の意、一一の法相は幟幟無きに非ず。然るに此の鉄塔は如来の三摩耶身なり。兩部法門は此の中を出ずべからず。五字・五仏に不同有りと雖も、並びに是れ五輪法界の所納なり。兩部大經を塔内に安置すること、専ら此の道理に契符す。大師此の塔を釈して「法界宮殿毘盧遮那現証卒都婆是也」と云うと云云。法界宮殿の中に何ぞ兩部法教を摂せざらんや。

五には、東寺の相承は写瓶を謬らず。所謂る他門の血脈は海雲・造玄の記を以て依憑と為す。而れども海雲は義操に受け、造玄は法全に受く。共に青龍和上の孫弟なり。高祖大師は直に和上〈惠果〉に謁して親子印璽を受く。門徒数輩の中、唯だ義明と高祖とのみ兩部大法を受く。自餘の諸人は纔かに一界を受くと雖も兩部を兼備せず。是の故に吳殷（五）の纂に云く、「日本沙門空海來りて聖教を求む。漢梵差ぶこと無し。猶し写瓶の如し」と云云。高祖の訓說を以て彼等の祖師に対比するに、更に同日の論に非ず。何に況んや『出生義』・『表制集』・『貞元錄』・『不空行狀』等、専ら東寺の伝に相符す。相承の正流、以て知んぬべし矣。

【典拠】

(1) 大師…空海『秘密曼荼羅教付法伝』卷二(弘全一・四六頁)に、「聞_三之此塔中有_三三世如来一切法藏_一願受持利_三濟群生_一。金剛命入。入已其塔尋閉。觀_三其内_一即法界宮殿毘盧遮那現証宰都波是也」と説かれることを指す。

(2) 海雲・造玄の記…前注(7) 参照。

(3) 海雲は義操に受け…海雲『金胎兩界師資相承』(正統蔵九五・四九六丁右く四九七丁右)には、金胎とみに「恵果—義操—海雲」と血脈が記されている。

(4) 造玄は法全に受く、造玄『胎金兩界血脈』(正統蔵九五・四九七丁右く左)には、胎藏界の血脈として「恵果—義操—法潤—法全—造玄」、金剛界の血脈として「恵果—恵則—元政—造玄」と記されている。

(5) 呉殷の纂…空海『秘密曼荼羅教付法伝』卷二に引用される、恵果の弟子呉殷の制した「恵果阿闍梨行状」(弘全一・四四頁)の取意の文。

(6) 『出生義』…不空訳『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』(大正一八・二九九頁上)に「釈師子得_三於毘盧舍那如来方授_一、而誓約伝_三金剛薩埵_一。金剛薩埵得_レ之、数百年伝_三龍智菩薩_一。龍智菩薩受_レ之、数百年伝_三龍智阿闍梨_一。又住持数百年、伝_三金剛智阿闍梨_一。金剛智阿闍梨以_三悲願力_一、将_三流_一演於中国、遂挈_レ瓶杖_レ錫、開元七載至_三自上京_一。十四載遽得_三其人_一、復以誓約伝_三不空金剛阿闍梨_一」とあることを指す。

（7）『表制集』…円照『代宗朝贈司空大弁正広智三藏和上表制集』卷四（大正五・八四七頁上）に、「昔毘盧遮那仏、以二瑜伽無上秘密最大乘教一伝於金剛薩埵。金剛薩埵、数百歳方得二龍猛菩薩一而伝授焉。龍猛、又数百歳乃伝二龍智阿闍梨一。龍智、又数百歳伝二金剛智阿闍梨一。金剛智、振二錫東一來伝於和上」とあることを指す。

（8）『貞元録』…円照『貞元新定釈教目錄』卷一四（大正五・八七五頁中）に、

（金剛智）和上、本中天竺三国刹利王伊舍那鉢摩第三子也。後因二南天国王將軍米准那薦聞、遂称二南天竺一人也。年始十歳於二那爛陀寺一出家、……（中略）……至三十一、往二南天竺、於二龍樹菩薩弟子龍智年七百歳今猶見在、經二七年一承事供養。受二学金剛頂瑜伽經及毘盧遮那總持陀羅尼法門、諸大乘經典并五明論、受二五部灌頂諸仏秘要之藏一無二不通達。遂辞二師龍智、却還二中天。

※引用内の（ ）は筆者が補った。

と、「龍猛（龍樹）—龍智—金剛智」の血脈がみられ、また「金剛頂瑜伽經及毘盧遮那總持陀羅尼法門」と、両部を想定させる記述もみられることを指す。

（9）『不空行状』…趙遷『大唐故大德贈司空大弁正広智不空三藏行状』（大正五〇・二九二頁中）に、「昔者婆伽梵毘盧遮那、以二金剛頂瑜伽秘密教主真言法印、付二属金剛手菩薩、垂近二千載、伝二龍猛菩薩。数百年後、龍猛伝二龍智阿遮梨耶、後数百年、龍智伝二金剛智阿遮利耶、金剛智伝二今之大師」とあることを指す。

【解説】

第四義は、南天鉄塔は秘密の幟幟であるというものである。密教では、一一の物の姿を諸尊の象徴と見るとし、この南天鉄塔は大日如来の三昧耶形であると説く。したがって、両部の法門はこの鉄塔より出でないものはないとする。たとえ五字・五仏が不同であつたとしても、これらはすべて五輪塔を象徴とする法界体性たる大日如来に納められるため、両部大経が塔内に安置されることは、この道理に符合するものであると主張する。そして空海がこの鉄塔を「法界宮殿毘盧遮那現証卒都婆」というのはこのためであるとし、どうして「法界宮殿」の中に両部の教えが含まれないことがあろうかと難じている。

第五義は、東密の相承は写瓶を謬らないというものである。他門の血脈は、海雲の『金胎両界師資相承』と、造玄の『胎金両界血脈』の記述によつたものであるが、海雲は義操より、造玄は法全より授法された者達で、この義操・法全は恵果の孫弟子であると指摘する。これに対して空海は恵果より直接授法され、恵果の多くの門弟の中で両部を相承したものはただ空海と義明のみであると説く。そして「恵果―空海」と両部が相承されたことは、呉殷の「恵果阿闍梨行状」に、「空海が入唐して聖教を写瓶のごとく伝えられた」とあることによつて明らかであると主張する。

すなわち、他門の血脈は、恵果の直接の相承者として名が挙げられていない海雲・造玄の記述に依拠しているが、東密の血脈は両部ともに「恵果―空海」と直接相承された者の名が連なつた、信憑性の高

いものであると指摘するのである。さらに、『三十七尊出生義』・『不空表制集』・『貞元録』・『不空行狀』等にみられる相承の記述は、東密の血脈と符合するものであるため、東密の相承こそが正流であると主張するのである。

【原文】

問。大日經若自鉄塔誦伝者、義決マヤ中何不示之耶。

答。此事甚有深義。謂金剛頂者金剛智体故、依仏果修生徳。大日經者胎藏理体故、依衆生本有徳。天竺二是月氏国故、金界西曼荼羅在処也。我朝大日本国故、胎藏東曼荼羅住処也。仍約兩部不二義者、共自鉄塔雖誦伝、依兩部而二辺者、必金剛頂自天竺二来、大日經当朝可出現。為表此義故、大師於我朝久米道場感得大日經。義決マヤ但出金剛頂隱大日經。是以高祖自晨旦雖請来大日經、請来録不載之。是表日本国出現義也。此義甚深。尤可秘藏耳。

【訓読】

問う。『大日經』若し鉄塔より誦伝せば、『義決』中に何ぞ之れを示さざるや。

答う。此の事甚だ深義有り。謂く『金剛頂』は金剛智体なるが故に、仏果修生の徳に依る。『大日經』は胎藏理体なるが故に、衆生本有の徳に依る。天竺二は是れ月氏国（一）なるが故に、金界西曼荼羅の在処なり。

我が朝は大日本国なるが故に、胎藏東曼荼羅の住処なり。仍て両部不二の義に約せば、共に鉄塔より誦伝すと雖も、両部而二の辺に依らば、必ず『金剛頂』は天竺より来り、『大日經』は当朝に出現すべし。此の義を表さんが為の故に、大師は我が朝の久米道場に於て『大日經』を感得す。『義決』は但だ『金剛頂』のみを出して『大日經』を隠す。是を以て高祖は晨旦より『大日經』を請来すと雖も、『請来録』に之れを載せず。是れ日本国出現の義を表すなり。此の義甚深なり。尤も秘藏すべきのみ。

【典故】

(1) 月氏国…古代中央アジアに活躍したイラン系遊牧民族を月氏というが、本条目における「月氏国」については、「天竺は是れ月氏国なるが故に」と説かれていることや、例えば安澄『中論疏記』卷七之末(大正六五・一九〇頁上)に、「有時暫来^二北天竺^一月氏国^一、降^二阿婆羅龍王^一」とあり、また日蓮『太田禅門許御書』卷上(大正八四・二八二頁上)に、「抑龍猛已前月氏国之中、無^二大日之三^一部經^一云歟」とあるように、インドやインドの一部地域を指しているものと考えられる。おそらくは、「インド…金剛界・西・月」「日本…胎藏・東・日」と相対させることを目的として、インドを月氏国と表現したのであろう。

【解説】

第四重の問答である。問者は、『大日経』が鉄塔より誦伝したものであるならば、どうして『金剛頂経義訣』の中にその記述がないのかと問うている。

これに対して答者は、このことには深義があるとする。すなわち、両部は不二であるものの、『金剛頂経』の特徴は金剛界の智体の面を表とし、修行して仏果を得ることを強調したものであり、一方の『大日経』は、胎藏の理体の面を表とし、衆生が本来的に仏であることを強調したものであるとそれぞれの特徴を区別している。さらに、インドは西に位置し、また月氏国とも称されるため、金剛界（月・西）の在所であり、日本は東に位置するため、胎藏（日・東）の在所であるとする。

したがって、両部不二の観点よりすれば、両經典は共に南天鉄塔より誦伝したものであるが、両部而二の観点によると、『金剛頂経』はインドより、『大日経』は日本より出現したものであると主張する。そして、この意義を表すために、空海は日本の久米寺において『大日経』を感得したのであると説明している。同様に、『金剛頂経義訣』に『大日経』へ対する記述がなく、『金剛頂経』のみを出したことも、この意義を表すものとしている。したがって、空海が中国より『大日経』を請来したものの『御請来目錄』には掲載しなかったのは、『大日経』の日本出現（久米寺感得）の義を表したためであると指摘している。この説は、他に見ることのない特殊なものであり、「此の義甚深なり。尤も秘藏すべきのみ」とあるように、あまり公にされることのなかった主張であると考えられる。

【原文】

大日經有鉄塔中文証事

大師金剛頂略釈云……（中略）……上引之。

法華伝十僧祥云、昔外国有鉄塔。高丈餘、於中安置芬陀利迦・阿差摩・摩訶毘盧遮那經等梵夾。各有百千頌^文。教時義一云、梵網經出金剛頂淺略之文。彼菩薩大藏經是華嚴經広本。大日義釈多引為証。然機有淺深、教有顯密。故於一經顯機聞為華嚴經、密機聞為胎藏教^文。

依此等文、鉄塔中有大日經。龍樹開塔之時、何不誦伝之耶。

【訓読】

『大日經』鉄塔中に有るの文証の事

大師⁽¹⁾『金剛頂略釈』に云く、……（中略）……へ上に之れを引けり。

『法華伝』十〈僧祥〉に云く、「昔外国に鉄塔有り。高さ丈餘、中に於て芬陀利迦・阿差摩・摩訶毘盧遮那經等の梵夾を安置す。各の百千頌有り」と⁽²⁾文り。

『教時義』一に云く、『梵網經』は『金剛頂』淺略の文を出す。彼の菩薩大藏經は是れ『華嚴經』の⁽⁴⁾広本なり。『大日義釈』に多く引いて証と為す。然るに機に淺深有り、教に顯密有り。故に一經に於て⁽⁵⁾

顕機は聞いて『華嚴經』と為し、密機は聞いて胎藏教と為す」と文り。

此れ等の文に依らば、鉄塔中に『大日經』有り。龍樹開塔の時、何ぞ之れを誦伝せざらんや。

【典拠】

（１）大師『金剛頂略釈』・本条目の前半部に引用される、空海撰『教王經開題』（弘全一・七一九頁）に「此經及大日經、并是龍猛菩薩、南天鉄塔中所誦出如来秘密藏之根本」とあることを指す。

（２）『法華伝』十・僧祥撰『法華伝記』卷一〇（大正五一・九五頁中）。

（３）芬陀利迦・阿差摩…詳細不明。「芬陀利迦」は『分陀利經』（詳細不明。『出三藏記集』へ大正五五・一八頁上）等にその名がみられる、「阿差摩」は『阿差末菩薩經』（大正一三・四〇三番）を指すか。

（４）『教時義』一・安然撰『真言宗教時義』卷一（大正七五・三九一頁下）。この引用文のみでは、『大日經』が南天鉄塔より誦出されたことを示す証文としての文意が取りにくいため、やや長文ではあるがこの引用文以前の文も示しておく。

然彼華嚴說主処「蓮華藏世界」。彼宗釈云、十仏境界所依有^一。一国土海円融自在。……（中略）
……二世界海。有^二三類。一蓮華莊嚴世界海。具^三足主伴。通^四因陀羅等。当^五是十仏境界。……（中略）
……今真言宗大日經云、我今出^一現妙華布地胎藏莊嚴世界種性海中、從^二種種樂欲。而化^三導之。
義釈云、大日如来、昔修^一香華供仏之行、感^二此妙華布地胎藏莊嚴世界^三云云。故知、華嚴宗蓮華

藏世界即是真言宗胎藏世界也。又金剛頂義決云、金剛智三藏從天竺來、海神嘖而令船沈一海。因以菩薩大藏經一投海。故得船浮。又梵網經出金剛頂淺略之文云。彼菩薩大藏經是華嚴經広本。大日義釈多引為証。然機有淺深、教有顯密。故於一經一顯機聞為華嚴經、密機聞為胎藏教。

この文で、まず安然是『華嚴經』の説主の在所である「蓮華藏世界」と、『大日經』・『大日經義釈』に説かれる「妙華布地胎藏莊嚴世界」を同一視する。これに続いて安然是、金剛智が「菩薩大藏經」（『金剛頂經義訣』によれば南天鉄塔より出された經）を海に投じたとする『金剛頂經義訣』の文を引き、この菩薩大藏經を『華嚴經』の広本とする。そして機根に浅深、教に顯密があることをいい、顯機は「菩薩大藏經」を『華嚴經』とし、密機は『大日經』とすると説いている。したがって、密機よりすれば、鉄塔より誦出した「菩薩大藏經」は『大日經』であるため、『大日經』も鉄塔より誦出したものであるとの証文として、ここに引用されているのだと考えられる。

(5) 『梵網經』…『金剛頂經義訣』卷上（大正三九・八〇八頁上）に、「梵網經兩卷、從此經中一出淺略之行相也」とあることを指す。

(6) 彼の菩薩大藏經…『金剛頂經義訣』卷上（大正三九・八〇八頁上）に、「其百千頌本、復是菩薩大藏經中次略也」とあることを指す。

【解説】

これよりは、本条目に関わる引用文が列記される。まずは『大日経』が鉄塔中に有ることを示す証文である。ここでは『教王経開題』（『金剛頂略釈』）、『法華伝記』、『教時問答』の三文を示したうえで、これらの文によって、南天鉄塔内に『大日経』が安置されていたことは明らかであり、龍猛が開塔した際に、『大日経』も誦伝したのであると主張している。

【原文】

龍猛伝大日経事

菩提心論云、如大毘盧遮那成仏経云。諸法無相。為虚空相^文。

貞元録十四云、金剛智三蔵和尚……（中略）……<sup>上血脈
段引之</sup>

【訓読】

龍猛『大日経』を伝うる事

『菩提心論』に云く、『大毘盧遮那成仏経』に云うが如し。諸法は無相なり。為く虚空の相なり^文と文り。

『貞元録』十四に云く、「金剛智三蔵和尚……（中略）……」へ上の血脈の段に之れを引けり。

【典拠】

(1) 『菩提心論』…伝龍猛撰『菩提心論』(大正三・五七三頁中)。

(2) 『貞元録』…前注(8) 参照。

【解説】

続いて、龍猛が『大日經』を伝えたことを示す証文として、『菩提心論』に引用される『大日經』の文と、『貞元録』の二文を示している。ここで『菩提心論』の文を引くのは、伝統的に龍猛の撰述とされる『菩提心論』に『大日經』が引用されていることを示すことで、龍猛が『大日經』を誦伝したからこそ、自らの撰述である『菩提心論』に『大日經』を引用することができたのであると主張したのであるであろう。

【原文】

非鉄塔誦伝事

大日經序崔敘述門
行請來云、毘盧遮那神力加持經……(中略)……大本十万頌。梵方秘而密藏。今所訳者、昔北天竺三国内有一小国、号為勃嚕羅。其国城北有大石山。……(中略)……其半腹有藏秘法之窟。每年七月即有衆聖集中。復有数千猿猴。捧經出曬。既当晴朗髣髴見之。将昇天階似觀雲鴈属。暴風忽至乃吹一梵夾下来時、採樵人輒收得。睹此奇特、便即奉献於王。王既受之得未曾有。……(中略)……時王、睹

闍梨有異欣然伝授此經^文。

安然教時義三破此文云、彼大日經序是俗人東宮学士所撰。諸阿闍梨、未許此序。有二失故。一違胎藏相承失。……（中略）……二違供養法疏失。……（中略）……^文。

於東寺意者、是非師資相伝義、感応出現辺也。仍偏不可非之歟。

【訓読】

鉄塔誦伝に非ざる事

『大日經序』^①〈崔牧述円行請来〉に云く、『毘盧遮那神力加持經』……（中略）……大本十万頌なり。梵方に秘して密藏す。今訳する所は、昔北天竺二国の界内に一の小国有り、号して勃嚧羅と為す。其の国城の北に大石山有り。……（中略）……其の半腹に秘法を蔵むるの窟有り。毎年七月に即ち衆聖有りて中に集まる。復た数千の猿猴有り。經を捧げて出し曬す。既に晴朗に当てて髣髴として之れを見る。將に天階に昇らんとすること雲鴈の属を觀るに似たり。暴風忽ちに至り乃ち一梵夾を吹き下り来る時、採樵の人輒く収め得たり。此の奇特を睹て、便即ち王に奉獻す。王既に之れを受け未曾有を得たり。……（中略）……時に王、闍梨を睹て異有りて欣然として此の經を伝授す^文と^文り。

安然の『教時義』三に此の文を破して云く、「彼の『大日經序』は是れ俗人の東宮学士の撰する所なり。^②諸阿闍梨、未だ此の序を許さず。二失有るが故に。一には胎藏相承に違する失。……（中略）……二

には『供養法疏』に違する失。……（中略）……」と文り。

東寺の意に於ては、是れ師資相伝の義に非ず、感応出現の辺なり。仍て偏に之れを非すべからざるか。

【典拠】

(1) 『大日経序』…崔牧『大毘盧遮那成仏神変加持经序』（出続藏三六・二七丁右上）。この文中の「阿闍梨」を、左注(2)の安然『教時問答』では、「達磨掬多」としている。

(2) 安然の『教時義』三…安然『真言宗教時義』卷三（大正七五・四三〇頁上〜中）。なお、中略部を示せば次の通りである。※『大日経供養次第法疏』の一部は略した。

有_二失_一故、不_レ用_二此序_一。一、違_二胎藏相承_一失。此胎藏教大日如来、授_二金剛手_一、金剛手授_二大那蘭陀寺達磨掬多_一、達磨掬多授_二同寺善無畏_一。二、違_二供養法疏_一失。新羅国零妙寺釈不可思議撰供養法疏云、……（中略）……和上受_レ請於_二金粟王所造塔辺_一求_二聖加被_一、此供養法忽現_二空中_一金字炳然。和上一遍略読分明記著。仰_レ空云、誰所造也。云、我所造也。問、阿誰我也。云、我是文殊師利也。即喚_二書人_一遂使_二写取_一、即与_二其王一本_一、自写_二一本_一随_レ行、将_レ行、流_二通四方_一也。所謂小子者厥号_二善無畏_一三藏和上_一即是。小僧不可思議、多幸面諮_二和上_一、所聞法要随_レ分抄記_{云々}。可_レ謂_二受_二經掬多_一之後、得_二文殊授_二念誦次第_一。_甲

すなわち安然は、胎藏法が「大日—金剛手—達磨掬多—善無畏」と次第するのに対し、『大日経序』

では達磨掬多に『大日經』を授けたのが「勃嚕羅国王」であることを難じている。そして、善無畏が達磨掬多より『大日經』を相承した後に、文殊より『大日經供養次第法』を授かったのだと主張している。

【解説】

続いて、『大日經』は鉄塔誦伝ではないという立場の証文である。ここでは、『大日經序』の文が示されている。また、この『大日經序』の文を難する安然『教時問答』も示されている。安然は、『大日經序』は俗人の東宮学士（皇太子の教育官）である崔牧の撰述であり、この記述を支持する阿闍梨はいないと主張する。そして、この『大日經序』の記述には、「胎藏相承に違する失」、「供養次第法疏」に違する失」の二つの過失があると説いている。

【原文】

一。道詮法師疑事

凡此有数箇篇目。一、三論宗支流^{云云}。此詞以何為証耶。三論者生身釈迦之遺教、真言者大日法身之極説也。顕密之混乱不弁是非故歟。

二、不空未詳何許人^{云云}。不空三藏是大日第六祖師、經論翻譯三藏、忝為三朝国師、広施両国化導。披貞

元録其疑自決歟。

三、不空三藏訳大日・金剛頂・蘇悉地經云云。大日・蘇悉地者善無畏訳也。何定不空訳耶。

四、無經論誠証云云。此難難思。約最初説相歟。兩部大經分明也。争生疑。若指相承次第歟。表制集・貞元録・義決・菩提心論・楞伽經等明説。何云無經論証耶。

【訓読】

一。道詮①法師の疑の事

凡そ此れに数箇の篇目有り。一には、三論宗の支流なりと云云。此の詞何を以て証と為すや。三論は生身釈迦の遺教、真言は大日法身の極説なり。顕密の混乱是非を弁ぜざる故か。

二には、不空は未だ何許の人なるか詳らかならずと云云。不空三藏は是れ大日第六の祖師、經論翻訳の三藏、忝く三朝の国師と為り、広く両国に化導を施す。『貞元録』を披かば其の疑は自ずから決するか。

三には、不空三藏は『大日』・『金剛頂』・『蘇悉地經』を訳すと云云。『大日』・『蘇悉地』は善無畏の訳なり。何ぞ不空の訳と定むるや。

四には、經論の誠証無しと云云。此の難は思い難し。最初の説相に約するか。兩部大經分明なり。争でか疑を生ぜん。若しは相承の次第を指すか。『表制集』・『貞元録』・『義決』・『菩提心論』・『楞伽經』等に明かに説けり。何ぞ經論の証無しと云云や。

【典故】

（1）道詮法師の疑・本条目の前半部分に引用される、三論宗の道詮（？）八七三、一説、八七六没）の『群家諍論』巻上の記述を指す。『群家諍論』は散逸されたと考えられていたが、大須文庫（真福寺文庫）に『群家諍論撮要』の名で冒頭部のみの写本の断簡が残っているようである（末本文美士『平安初期仏教思想の研究——安然の思想形成を中心として』〈春秋社・一九九五〉二四七頁参照）。前号と重複するが、本条目に引かれる『群家諍論』の引用文を、ここに改めて示しておく。なお、左の引用文中に引いた①～⑦の傍線部は、本条目において了賢が非難する七箇所である。

道詮群家諍論上云、夫真言宗者、近代所伝未詳所師。①彼宗是三論之支流耳。②唐朝不空三藏へ未詳何許人也。③訳大毘盧遮那経七卷、及金剛頂経、蘇悉地経、専以為三宗簡。彼宗人伝述、天竺・晨旦相承師資。而④無経論誠証。故未足取信。又云、⑤彼宗所言報仏説法、⑥以三性空為門頭道理。理不空。如⑦是専義、法相相似。彼宗云、以龍樹為本師。未詳所由文。

【解説】

これよりは、三論宗の道詮の『群家諍論』に対する反駁となっている。道詮の七つの難に対し、了賢

は簡潔ながらもその一々に反論している。

まず一つ目は、「真言宗は三論宗の支流である」という道詮の記述に対する反論である。これに対し、三論宗は生身釈迦の教えである顕教、真言宗は法身大日如来の説である密教であるため、その指摘は全く当たらないと主張する。

二つ目は、「不空がどのような人物であるか詳らかでない」という記述に対する反論である。これに対し、不空は密教付法第六祖で経論翻訳の三蔵であり、また玄宗・肅宗・代宗の三皇帝の国師となって国家を教導した人物であるとの実績を示している。そして『貞元録』を披けば不空の翻訳した経論や実績は明らかであり、不空がいかなる人物であるのか明らかになるであろうと結んでいる。

三つ目は、「不空が『大日経』・『金剛頂経』・『蘇悉地経』を翻訳した」という記述に対する反論である。これに対し、『大日経』・『蘇悉地経』は善無畏の翻訳であると訂正している。

四つ目は、「真言宗の人の伝えによれば、インド・中国と師資相承したものとされるが、経論に誠証がない」という記述に対する反論である。これに対し、真言宗の相承については、すでに示したように『不空表制集』・『貞元録』・『金剛頂経義訣』・『菩提心論』・『楞伽経』等に明かに説かれているとし、道詮の難を退けている。

【原文】

五、報仏說法云云。是又自性法身自受法樂談話也。何輒驅自宗判報仏説耶。

六、以性空為門顯道理。理不空云云。此疑未詳。即事而真之義不可判性空為門。又大空三昧之談、何称不空乎。

七、法相相似。龍樹為本師未詳所由云云。法相者生滅無常家之所論、五性各別之權門也。法性法爾之極説、十界平等之幽旨、何義類彼、何理同彼。何況自己論三論支流。寧非招自語相違失耶。所談遙異法相之上者、以龍猛為祖之条、更難及疑難。凡義決・表制集・貞元録等、以龍猛為真言相承祖師。云彼云此難勢、更不足会通歟。

已上条条篇目不伺真言深致。猥任顯教淺執馳胸臆加破難。愚拙之至、最堪哀耳。

【訓読】

五には、報仏說法と云云。是れ又自性法身自受法樂の談話なり。何ぞ輒く自宗を驅つて報仏の説と判ざるや。

六には、性空を以て門と為して道理を顯す。理は不空なりと云云。此の疑未だ詳らかならず。即事而真の義は性空を門と為すとは判ずべからず。又大空三昧の談、何ぞ不空と称せんや。

七には、法相に相似す。龍樹を本師と為すこと未だ所由を詳らかにせずと云云。法相とは生滅無常家の

所論、五性各別の権門なり。法性法爾の極説、十界平等の幽旨、何の義か彼に類し、何の理か彼に同ぜん。何に況んや自ら已に三論の支流と論ず。寧ろ自語相違の失を招くに非ずや。所談遙かに法相に異なるの上は、龍猛を以て祖と為るの条、更に疑難に及び難し。凡そ『義決』・『表制集』・『貞元録』等、龍猛を以て真言相承の祖師と為す。彼と云い此れと云う難勢、更に会通に足らざるか。

已上条条篇目は真言の深致を伺わず。猥りに顕教の浅執に任せて胸臆に馳せて破難を加う。愚拙の至、最も哀れむに堪たり。

【解説】

五つ目は、「真言宗は報身の説法である」という道詮の記述に対する反論である。これに対し、真言宗は自性法身の自受法樂の説であり、報身の説ではないと主張する。

六つ目は、「真言宗は、性空を道理やあり方とし、不空を真理とする」という記述に対する反論である。これに対し、まずこの疑義の意図するところが詳らかではないとしたうえで、真言宗の旨とする即事而真の義は、性空を道理とはしていないと主張する。また、大日如来の三昧である大空三昧をなぜ不空と称するのか（大空三昧と不空とは異なる）と指摘する。

七つ目は、「（性空を道理やあり方とし、不空を真理とする真言宗は）法相宗に類似しており、龍樹を本師とする理由が詳らかではない」という記述に対する反論である。これに対し、法相宗は生滅無常を旨と

する者の所論で、五姓各別を主張する権門であるとし、法性法爾の説や十界平等を旨とする真言宗とは全く異なるものであると主張する。さらに、先に道詮は「真言宗は三論の支流」と説いているため、ここで「法相宗に類似する」というのは矛盾のある主張であると指摘する。そして、真言宗は法相宗とは大きく異なるため龍猛を祖師とすることに何ら問題はないとし、さらに『金剛頂経義訣』・『不空表制集』・『貞元祿』等にも龍猛を真言相承の祖師としていると指摘している。

そして最後に、これら七つの道詮の疑義は、真言宗の深義を知らない、顕教の浅い立場からの難であると結んでいる。

以上、本条目は、徳一の『真言宗未決文』の「鉄塔疑」における鉄塔相承の文伝の有無の議論と、道詮の『群家諍論』における真言宗批判に対する反駁を中心に構成され、そこに、胎藏法の鉄塔相承の有無も併せて議論されていた。問者は、主に台密が依拠する史料を用いて疑義を示し、答者（了賢・真言宗側）は、一貫して両部がともに南天鉄塔において相承されたものであると主張していた。この鉄塔相承の議論が、真言宗の根幹である師資相承の正当性を問う非常に重要なものであることを、改めて伺うことができる条目といえる。

また一部ではあるものの、散逸したとされる道詮の『群家諍論』を引用していることから、この条目が史料としても価値のあるものであると評することができよう。

註

- 1 『仁和寺史料』「寺誌編一」二二二頁（吉川弘文館・二〇一三）。
 - 2 『仁和寺史料』「寺誌編一」三二八頁（吉川弘文館・二〇一三）。
 - 3 この「毛利時賢」と「毛利親宗」が如何なる人物であるのかは不明であり、同一人物であるのかも不明である。尚、了賢の事績等については『密教大辞典』や『真言宗全書』解題「著者略伝」（三三九頁上～三四〇頁上）に詳しい。
 - 4 『真言宗全書』解題（二二六頁下～二二九頁下）。
 - 5 『他師破決集』卷二（真全二・二五八頁上）。
 - 6 『他師破決集』卷五（真全二・三〇八頁下）。
 - 7 『真言宗全書』解題では、「大覚寺殿」を「性円親王殿」と推測している（二二九頁上）。
- 〈キーワード〉了賢、『他師破決集』、南天鉄塔、徳一、『真言宗未決文』、鉄塔疑